

慈悲の仏塔

鎌倉と浅間様の隠遁地

2008年10月2日 箱根 ホテル南風荘にて

ルベン・セダーニョ

富士山の頂上の霊域には人々より敬愛されている鎌倉と浅間様の「慈悲の仏塔」がある。この隠遁地の指導僧達によると、慈悲の仏塔は、鎌倉の「聖地」、北京の観音菩薩、コシウスコ山の紫炎、と精霊界のネットワークで繋がっており、東方の昇華の四辺形を形成している。この隠遁の地に入るには、階ごとに設けられた講堂をゆっくりと上がって行く。塔は全部で7層となっている。「人生の潮流」が訪れ、慈悲の心を熟達する事が必要となった者、もしくは熟達する事を切望する者のみが、この仏塔に入り登り行く事ができる。もし各階の講堂で与えられる教えを学ぶのであれば、次の階へと上がる事ができる。もし異論を唱えたり、邪な心を持っていたり、自分自身の私的な言い訳があったり、そこで直観通りに行動したくないのであれば、それはそれで何も問題はない。ただ外部を降りていく階段を下りれば良いだけだ。そしてその階段は決して頂上に辿り着く事はない。この塔は一生を通して、あるいはいくつもの人生を通して登って行く。人はこの場で生活しながら、もしくはこの場に通いながら鍛錬を受けているのだ。この隠遁の地に居るといふ事の効果は、人に存在意義を問いかける困難な状況によって、そしてただ唯一「許し」によって人が解決しようとする窮地によって、実証される。

一階

天空の藍色が放射状に広がり紫色に光輝く一階で、何よりもまず最初に思い至る事は、意思や素質、願望、健全な心について、瞑想し教えを受ける事である。相手が何をしようとも、常に相手を許す気持ちを持たなければならない。この事が完全に理解できるまでは、塔の二階に上がる事はならない。このために鳥居には「力は許しの中にあり」という格言が記されている。

二階

「慈悲の仏塔」の二階は金色に煌めく紫色で、そこに辿り着くと「許しの英知の聖職者達」に迎えられ、許すという態度の中にある「至高の英知」について直ちに瞑想するように促される。ここで鳥居は語る。賢者や本当の精神の師というものはすべて許しの存在である。光の存在は脅したり、恐怖を齎したり裁いたりはしない。これらの事をする者は闇の者達である。この事を学び自覚しない限り、三階に進む事はできない。

三階

「慈悲の仏塔」の三階は薔薇色が美しく放射状に広がる紫色で、そこに辿り着くと許しを内含する愛について全て、瞑想し、学び、理解しなければならないという事に気付く。ここでの瞑想と修行の鍵は鳥居の横木に掛けられている「愛は許しと共にのみ存在する」という言葉にある。言うまでも無い事であるが、人生においていつかは必ず許す事で愛を証明しなくてはならない状況に置かれる。主イエスはこの段階の教えを大変よく習得された。

四階

ここまでの階の修行を克服した者は、「慈悲の仏塔」の四階に上る。四階は白い水晶の虹色に煌めく紫色で、ここにおいては「自らを浄化する手段は唯一許す事にある」という事に関して修行と瞑想を行う。それを思い起こさせるように鳥居の中央には全ての言語で分かる文字でこの言葉が記されている。節食をする者もいれば、香水浴をしたり、煎じ薬を飲んだり、瞑想をする者もいるだろう。しかし、自らを真に浄化する唯一の手段は許す事である。

五階

「慈悲の仏塔」の五階に上がると、偉大な瞑想と修行とは、心の底からの真の幸せへの手段とは、許す事であるのだと悟る。「不幸の鍵は恨みである。」鳥居に掲げられた額束は思い起こさせる。「幸福の鍵は許しである」と。

六階

階を上るごとに足取りは軽くなってくる。こうして「慈悲の仏塔」の六階に辿り着く。ここでは鳥居の上に掲げられた「真の平和は許しと共に訪れる」という言葉について、瞑想し、修行し、鍛錬する。

七階

こうして「慈悲の仏塔」の七階に辿り着く。ここでは天井は天頂に開かれ、入口の鳥居

には「唯許すだけで良い」の言葉が高々と掲げられている。そこでは巨大な篝火が明かりとして焚かれ、富士山の円錐形の頂上でこの地の高僧、敬愛される鎌倉と浅間様、に迎えられる。彼らが招くまま「炎の中心」へと入り、炎より出ると「慈悲深い愛の許しの聖職者」として姿を変えている。この高みへと到達した者は「富士山信徒会」を結成し、質素な薄紫色の着物と白い絹の帯を与えられる。この儀式の後に、この霊地の外的な象徴である薄紫色の衣を脱ぎ去り、許しが齋す心の寛容さや英知、愛、純潔、幸福、平和について、人生の中の日課として教えるために現世に戻される。富士山信徒会の会員となったのである。

「富士山信徒会」の信者となる事を望む者は、全員がより簡単に視覚化できるように富士山の写真を手にする事ができ、訓示を読み、瞑想し富士山の「慈悲の仏塔」を登りながら「計画的な自覚」を作り上げる事ができる。この活動には、エドヴァルド・グリーグ作の組曲「ペール・ギュント」の「朝の歌」を聞きながら参列する事ができる。

注：指導増の旋律は「朝の歌」と題し、その名のごとく、教えを受けるためには朝の5時に起きなければならなかった。これは朝の歌である。宿舎に戻りこの対話を行った一日を終えたとき、自分の使った紫色の着物が、因果的に、この教えの物質的な側面の証として手に残るのであった。

蘇州 瑞光塔

戻る